ラーマ物語から見た北インドの季節と年中行事

坂田貞二

文武両道に秀でていてスィーター姫と結婚したラーマ王子、恋人ラーダー姫と戯れていた牛飼いの王子クリシュナ。かれらは神が化身して人間の姿で生れてきた存在として、インドの人々に親しまれている。ラーマもクリシュナも、インドの人口十三億超の八十％くらいを占めるヒンドゥー教徒の英雄である。

この小文では、つぎのことをしたい。

ラーマら四人の王子が、ダシャラタ王の三人の妃に授かった（ラーマは向かって左端のカウシャルヤー妃に抱かれている）。1869年刊の石板刷り本から。

①ラーマの物語を題材にして、一年十二ヶ月のさまを詠ったバーラハ・マーサー（十二の月）を翻訳・紹介する。それにより、北インドの季節の移りかわりとラーマに関する祭礼について述べる。

ラーヴァナを亡ぼして凱旋したラーマは、王座に就く。隣りの女性は、王妃になったスィーター。1869年刊の石板刷り本から。

②そのうえで、北インドのヒンドゥー教徒にとって主要な祭礼でありながら、ラーマの十二の月に出てこないものに言及する。

つまりこのエッセイは、ラーマの生涯を採りあげたバーラハ・マーサーを紹介しながら、北インドの季節のあらましを述べ、併せてヒンドゥー教徒にとって大切な祭礼にも触れるものである。

①で紹介する歌の底本は、インドのウッタル・プラデーシュ州（北部州、ヒンディー語が話される地域の中心）の民謡を、原文・そのローマ字転写・英訳で記している左記の文献である。

Tewari, Laxmi Ganesh. *Folk Songs from Uttar Pradesh*, New Delhi: Printworld,2006.

紹介にあたり、予備知識がなくともラーマ物語がわかるよう補った部分がある。一方で紙幅の都合により何ヶ月かの歌を省いたところもある。

なおヒンドゥー教徒の暦は、チャイト月にはじまり、ファーグン月でおわる。その季節がわかるように、訳文ではヒンドゥー暦の名を**太字で**示めし、それに春夏秋冬を付け足した。祭礼名も**太字**にした。

北インドの平地のデリー付近では、夏のジェート月（太陽暦五月・六月）ころの昼間に気温が四十度近くまで上る。農村では日の出まえに野良仕事をすませ、日中は戸や窓を閉めて外の熱気が入らないようにする。一方で冬のプース月（太陽暦の十二月・一月）の朝・晩は、ときに五度を割り霜が降りるので焚き火をする。

雨が多いのは南西モンスーン期のサーヴァン月（太陽暦七月・八月）で、そのころの雨量は二〇〇ミリを超える。東京での雨量は、同じ時期にその半分くらいである。

こういうことを念頭に置いて季節の民謡を読むと、北インドの平地の気候を感じとれ

よう。

春の**チャイト月**に**ラーム・ナワミー祭**、
　アワドの女衆はその祭りを祝う。
ダシャラタ王はそうと聞いて駆けつけ、
　祝いの民に象や牛を贈る。
夏の**バイサーク月**にカイケーイー妃が、
　自分の子のバラタを王座にと主張。
ラーマの弟バラタを生んだ母の妃は
　きっと呪いを受けるはず。
カイケーイーは天空地三界の主ラーマを、
　森に追いやりみなを悲します。
暑いさかりの**ジェート月**に、
　バラタを王座にと長老たちがいう。
バラタはそれを聞きいれず、
　言にしたがわねどわれを殺すなと叫ぶ。
われはラーマの下僕にすぎぬ、
　王位に就くべきはラーマだともいう。
雨期の**アーシャール月**になり、
　バラタはラーマに会いたいと思う。
配下と自分のために馬車や象を整え、
　一行は大海に注ぐ川のように森に。
（送りに来た人が大勢いる雨期の**サーヴァン月**とバラタが森で草木を食す**バードン月**、家祭僧がみなを祝福する秋の**クワール月**を略）
秋の**カーティカ月**に川の畔を発ったバラタは、
　ラーマらが住むチトラクータの森に着く。
スィーター妃・ラクシュマナ・ラーマに会い、
　バラタはラーマの脚に額づき敬意を表す。
ラーマは目に涙を浮かべバラタを抱きおこし、
「汝はみなに幸せをもたらす」という。
晩秋の**アガハン月**にラーマはバラタに、
　「汝は国に帰り国を治めよ」とも。
民はそれでみな幸せになる、
　「十四年すればわれも国に戻る」という。
冬の**プース月**にラーマはバラタに履物を渡し、
　「王座にこれを置き国を治めよ」と命ず。
（バラタがアヨーディャーの都に戻った冬の**マーガ月**に、ラーマは心に平安を得る）
初春**ファーグン月**にラーマは羅刹を成敗し、
　妃のスィーターを救いだす。
ランカー国の羅刹ラーヴァナ亡きあとは、
　弟ヴィビーシャナに国を継がす。
シヴァ神・創造神らみなが来たり、
　都に戻ったラーマを国の王座に就かす。
（**ダシャハラー祭**）。

以上でラーマ物語を翻訳しながら、北インドの季節の移りかわりも記した。しかしその物語には重要な祭礼が漏れている。それで冒頭に挙げた②の課題として、大事な祭礼を補足してこの小文を絞めくくりたい。

それには、北インドのヒンドゥー教徒が行う祭礼を詳しく記した左記の文献を参照する。

・Bahan, Āśā & Lādo Bahan.*Bhāratīya Vratyohār aur Mahilā Sangīt* Haridwār: Raṇdhīr Prakāśan ND.＝（バハン、アーシャーら『インドの儀礼・祭りと女性の歌』）。

なお各祭礼の末尾の（　）内は、バハンらの著書に言及されている頁である。

・**「ガンガウル祭」**
春のチャイト月の満月に向かう三日に、既婚で夫が生存している女性が午前中に食を断ち、シヴァ神の像を砂で造って拝み、夫の長命を祈る（二七―三〇頁）。

・**「ラーム・ナワミー祭」**
ラーマが生誕した春のチャイト月の満月に向かう九日に、ラーマの生誕を祝って行う（三二―三三頁）。

・**「クリシュナ・ジャナム・アシュトミー祭」**
雨期のバードン月の新月に向かう八日に、牧童クリシュナの生誕を祝ってそのお姿を拝しに寺院に行く（八七―九〇頁）。

・**「ダシャハラー祭**または**ヴィジャヤ・ダシャミー祭」**
初春のファーグン月の満月に向かう十日に、ラーマが**十**（ダシャ）の悪を**遠ざけた**（ハラー）、または**ラーマが勝利した**（ヴィジャヤ）**十日**（ダシャミー）を祝って行われる（一二七―一三〇頁）。

・**「ディーパーワリー祭」**
秋のカーティカ月の新月の晩に行われる祭礼で、光りでラクシュミー女神を家に招いて、人々が富をいただこうとする（一四二―一四五頁）。

・**「ホーリー祭」**
一年の最終月ファーグンの満月の夜に行われる。旧年の汚れを燃やしつくし、人々が色水・色粉をかけあって新春を迎える（二〇二―二〇五頁）。

（さかた　ていじ・拓殖大学名誉教授）